

令和三年八月吉日初版作成

自分自身が変われば

すべてが変わる

高嶋善三郎

目次

- 自らを救うのは自分自身・・・・・・・・・・ 3
- 新しい神聖復活の習慣・・・・・・・・・・ 3
- 人間神の子観と闇の面の消えてゆく姿・・・・・・・・ 4
- 自分自身がやらなければならないこと・・・・・・・・ 5
- すべてを自ら自身と観ずる心・・・・・・・・・・ 5
- 自他一体の心、愛を深めることが靈的進化・・・・・・・・ 6
- 愛は執着の想いを伴いやすい・・・・・・・・・・ 7
- 宇宙神から直接降ろされた大生命の根源の光・・・・・・・・ 8
- 自分自身が変わればすべてが変わる・・・・・・・・ 9

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構です。お聞かせください。また、送られてきた資料が次回以降不要の場合は、次のケータイのSMSか、アドレスにご連絡ください。

(ケータイ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

自らを救うのは自分自身

白光誌2021年6月号の神聖の羅針盤「究極の真理をどう受け取るか」において、五井先生から昌美先生に伝えられた「…最後にはっきり汝らに言い聞かせる、と五井先生は前置きされ、次のように語られた。究極、自らを救うのは、宇宙神でもない。五井先生 でもない。守護霊守護神でもない。昌美でもない。自分を救えるのは、自分自身以外にない」について、私たちはどのように受けとめるべきか。

これについては、理事、理事心得の方々から「私たち会員は、宇宙神、五井先生、守護霊守護神、昌美先生に救いを求めても、自分自身の中にある神聖（本心）に目覚めて神聖を復活させなければ、自らを救うできない。五井先生や昌美先生や守護霊守護神は私たちのこの天命が完うできるように支援してください。存在である」等コメントがありました。

では、自らを救うという神聖を復活させるとはどういうことなのか、説明してくださいという質問がありましたので、整理したいと思います。

新しい神聖復活の習慣

この質問に対するヒントは、既に五井先生が昌美先生にメッ

セージされており、白光誌（2020年1月号）で掲載されています。それを見てみましょう。

「物事は変らないのだ、人を変えよう、物事を自分のほうにもってこさせようと、これは自分に必要なものだと言っても物事は変えられない。自分自身が変わらなければ、無理なのだ。それをやらずに、他人を批判することは誰でもできる。事実、愚か者ほど他人を批判したがる。

最も素晴らしい人は自分の神性を知っている人だ。批判もしなければ、人に媚びて、いたずらに褒めることもしない。神性そのものが現われているので、人が自然と寄って来る。だから、自らの習慣の想いを変えることだ。習慣の自分が出たら、それは新しい神聖復活の習慣をつけるチャンスなのだ。神聖復活の印を何千何万と続けている人々も、初めはそうだったのだ。自分の習慣の想いを神聖復活に変えさえすれば、何でも成就できる。誰が無理だと言おうとも、自分に、出来る絶対をやってみせるという強い信念と意識があれば、必ず出来るのだ。」

自分自身を変えるとは、これまでの自分の習慣の想いを新しい神聖の習慣に変えることとされています。

人を変えよう、物事を自分のほうにもってこさせようと、これは自分に必要なものだと言っても物事は変えられない。これを変えるには、自分の習慣の元になっている自分自身のものの観方を変えなければ、すべては、変えることは無理なのである。

他人を無意識のうちに批判してしまうのは、習慣化された想念行為によるのです。

ではここで言われている自分の習慣の元になっているものは、観方は、どういうものと理解したらよいのでしょうか。

それは、眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心等、自然（じねん）の心に相反する業因縁の心なのです。

この心が習慣化されると、自己の想念行為によってつくった環境を輪のように廻りつづけることとなります。つまり自己の想念行為のままに、生まれ更りして、肉体界と他界（幽界、霊界の下層、ヨガの教えでいえば、肉体、アストラル界、メンタル界）を往ったり来たりして生活してゆくこととなります。この状態を輪廻といい、自己の想念行為の波に乗って廻りつづけるという法則が出来ており、輪廻転生の流れ（貧老病死の苦界）がつくりだされ、この世界から解脱できなくなります。

このようなになったのは、光一元の世界からこの闇の肉体界を愛一元の世界にするために意識波動を下げ、この肉体界に降りてきて、霊・魂・魄として三界（霊界・幽界・肉体界）に活動していた私たちは、しだいに肉体系人間そのものになってきて、肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心（精神）

とは、肉体の機関が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられないようになっていったことによります。

人間神の子観と闇の面の消えてゆく姿

一方新しい神聖復活の習慣の元になっているものの観方は、人間神の子観です。『神は沈黙していない』より整理します。

神様は全体であり、神の子人間は、全体の光明が、光線となって別れ別れの働きをしているので、人間同志は決して、お互いに孤立したり自己主義になるべきものでない。そこで、神のみ心中に、自己も他もすべての人類をも入れ切ってしまうって、日々生命新たに、光明燦然と生活してゆくことが絶対に必要なのだと言われているのです。

この観方は、お互いに孤立したことにより生じた、不幸、悲しみ、恐怖、恨み、妬み、憎悪、不平、不満等々の想いや行為を、人間の真（神）性から出るものではなく、この世の中を、神の子人間が歩みつづけてゆく時に削りとられてゆく、闇の面の消えてゆく姿である、と全否定してゆく、断々固たる人間神の子、仏の子観なのです。

神性の人間を肯定するのに、肉体の想いで肯定しようとするのは無理なのです。肉体の人間の想いにはやはり業生の世界の

様相しかうつらない。そこで消えてゆく姿、という言葉を使つて、一度、肉体人間そのものさえも、全否定しきっている。しかし、それを大げさに、肉体無し、などとは説かず、只何気ない言葉として消えてゆく姿を使い、あらゆる肉体世界の想念や出来事を、その消えてゆく姿という想いに乗せて、神の世界、神のみ心である、大光明の中、完全性の中、そして各個人に内在する本心(神)の中に融合させてしまう習慣です。

この神本来の本心の世界は、愛深き心、美しく清らかな心、真をつくす心、善事をなす心等々、すべて人間生活を高め、深める心のひびきの世界、即ち神性の世界なのです。

さらに言えば、生き続ける生命である、即ち無死無生の心、空の底にある無限の心と等しき心である。本心の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命していくのです。肉体意識がいかなる不安恐怖の感情に襲われても、動揺もなく、ただ喜びと感謝に包まれ、必要に応じ、無限なる叡智など無限あるすべてを現わし、満たす存在です。

自分自身がやらなければならぬこと

また、自らを救えるのは、自分自身以外にないというお言葉の裏には、次の事実があるのです。

守護霊は霊界、幽界、肉体界と三界、を通して働ける者なので、幽界において、できつつある運命、あるいはすでにできあがって、時間の経過につれて自然に肉体界(現界)の運命として現われぬように自分が引き受け、修正してくださっているのです。修正するのは現わす業想念(誤てる想念)の90%で、後10%は本人の魂を磨くため業想念(誤てる想念)を夢などにして現わすのです。現われれば消えるのが想念の性格であるので、守護霊が夢等により、大難を小難にして現わし、消してくださっているのです。この10%の業想念については、己自身で真理につながり、本心の光の中に融合させ、光に還元し、修正しなければ、己自身の魂は磨かれず、業想念を新たにたつてしまうのです。守護の神霊がせっかく修正してくださったものまでも無駄にしてしまうことになるのです。

すべて神に全託しているのだから、自分は何もしなくてもよいという考え方がありますが、このような考え方になるのは、全託の意味を正しく受け止めていないことによるのです。全託の意味は、真理に繋がりが、すべてを神に委ね、肉体人間の想念行為中心の生き方を棄て、人間神の子観にもとづく生き方をすることなのです。人間神の子観にもとづき生きていくことは、既に整理したとおり、努力をすることは無限にあるのです。

すべてを自ら自身と観ずる心

新しい神聖復活の習慣の根幹となっている、神我一体観（人間神の子観）と自他一体観について、整理してみましょう。

「人間は霊であり、肉体はその一つの現われであって、人間そのものではない。人間とは神の生命の法則を自由に操って、この現象の世界に、形の上の創造を遂げてゆくものであると識り、神我一体観、自他一体観を行動として表現してゆく」という天命を私たちは担っています。

結論から言えば、神我一体観と自他一体観とは、一体のものであり、自他一体となるには、神我一体にならなければ、達成不可能であり、自他一体が深まれば、神我一体はさらに深まるという関係なのです。

『愛すること』によると、人間は肉体系に住みながら、神霊の世界に住んでいるのであり、想念が神霊の世界のひびきに通ずれば、神霊の世界にその人の生活の重点が置かれるのであり、その人は肉体系に存在しながら、神霊のひびきである、高い深い叡智に導かれて生活できるのであります。

また『続宗教問答』の問92「神様の中に入るといふことは、現実逃避ではないかと人にいわれましたが、いかがなものでしょう。」でも、神我一体観と自他一体観との関係が言及されています。

宇宙の法則に乗るとは、自分が神のみ心と一つになって生きていくことであり、自己のあらゆる動きが、そのまま他の人のためにもなり、人類のために役立っている状態といえる。何故ならば、神のみ心は、大調和であって、すべてを生かしきることに、その目的があるからである。自己の生命を自由に生かしたい、のびのびと平安に生きてゆきたい、と思うならば、まず自己の心を自由の根源であり、生命の根源である、神のみ心の中に入れきってしまうことが必要である。

神のみ心の中に自己を入れ切るといふことは、神のみ心と同じような心で生きてゆくことである。神のみ心とは、まず、平和な心ということ、すべてを自ら自身と観ずる心、こちら側からいえば、自他一体の心ということになる。別の言葉で言えば、愛ということになると五井先生は言われているのです。

自他一体の心、愛を深めることが霊的進化

そして、この自他一体の心、愛を深めるとは、どういうことなのか、何故分霊たちにはそれができるのかを理解できる、五井先生のお言葉があります。『白光への道』をみてみましょう。

自他一体の心、愛を深めていくことは、他の人と色々な形を通して、相手を思いやり、お互いに助け合い、お互いの生命を

輝かせながら、靈的進化を遂げることなのです。

実は、私たち分靈は、全体の光明が、光線となって別れ別れの働きをしているが、お互いの心が通じ合え、靈的進化を遂げられる生命の働きを内にもっているのです。

神は大生命であり、大靈である。この大靈が、七つの靈に働きを分けて、いわゆる職能というか、働きの特色というか、使命というか、ともあれ、七つの色に分かれた。これを七つの直靈という。この七つの直靈が各自のいのちを働きだし、互いに交流し合い助け合って、この人類世界に、やがて神の世界を完成しようとしているのです。

この七つの直靈から、分靈が生まれ、その分靈から又分靈が生まれているが、その分靈たちは、いずれも、七つの直靈の、いずれかの特色を強くもち、後の六つの要素は、その特色の裏面で、この特色を助けて働いているわけで、各分靈がそうした一つの特色と、六つの補助的働きをもって活躍しています。

例えば、紫の働きをもつ直靈から生みなされた、紫の特色をもつ分靈は輪廻転生を繰り返しながら進化向上の道をたどっていくその過程においても、本来の特色である紫の本質的働きは変わらないが、その特色は内に隠されて、今生においては補助的働きの一つである青の要素を強く表に現わしているかもしれない。しかし人間は自分の特色の他の六つの要素の働きを、そ

の時その時に体験としてマスターしながら、本来の特色を深めつつ、人間的にも調和完成された姿となって直靈に帰一していく道をたどっていくのです。

そうした神の働き、光の輝き、生命の働きを、人間各自は、自己のうちにもっているものであって、この生命の働きを、天命通り、天の使命通りに働かせ得る人、運用出来る人を神の使徒といい、自己の運命を完成させた人といい、天命を完うした人、といわれています。

愛は執着の想いを伴いやすい

しかし、この地上界には神界の愛という心がそのまま現われていないと言われているのです。何故現われにくいのでしょうか。

愛は執着の想いを伴いやすく、愛の心の流れが、把われの想いで、一つとところ、一つ想いに止まってしまい、愛することが苦しみとなり、愛されることが重荷となり、神のみ心を離れた、神のみ心の中にはない、消えてゆく姿的な業想念波を巻き起こして、そこに不幸や悲劇が生まれているのです。

これは、普通、愛と簡単にいわれているものは、ほとんどが、業想念（因縁）と業想念との融合によって行われるか、業想念の自我欲望の満足を愛と思い違えているからである。つまり執着、執愛、自分の生命を縛り、他の生命を自我欲望のために縛

りつけてしまっているからです。

別な言葉で云えば、純粹なる愛（神）の行為が、直接その光のままに行為される時には、肉体人間にとって、あまりにもその光が強すぎ、峻厳すぎるのを、適当に薄め弱めてこの地上界の肉体人間に適合するようにしてゆくところが情であるが、この地上肉体界は現在では、神の心と業想念の二つが入り交じって出来上がっている世界なので、情というところは、愛（神）の面と、業想念（執着）の面との、どちらにも働きかけてゆくので、うっかりすると、愛情だと思っている行為が、いつの間にか、業想念という執着の方に流れていつている場合があるからです。

このようになってしまうのは、愛する、ということが、光を他に与えることである、という神のみ心、つまり原則を知らないから起こっているのです。また、愛されたいのに愛されないのは、自分が相手を愛さないからだということを、その人は頭で知っているかもしれないが、心ではわからないからである。五井先生は言われているのです。

宇宙神から直接降ろされた大生命の根源の光

では、自他一体の心である、愛をいかに現わしていくかについて『宗教問答』問80「悟るとは全く感情がなくなるのです

か。」から整理してみましよう。

愛とは、明るい把われのない心、いつも神のみ心の中に入っている想いから発する本質的な生命力である、光が分かれたものが一つに結ばれ統一されたところに現われる心のあり方である。それが縦に働くと神への信となり、横に働くと隣人愛、人類愛となります。

愛は光そのものであるから、電流が電球を通さないと光を現わせないのと同様に、肉体の人間世界に働く時は、感情想念の一つである情とよばれている業想念の波に乗って働かないと、その効果を發揮することが出来ない。愛が感情の波に蔽われてしまえば、それは執着となって、愛の心をマイナス面にひきずっていつてしまうが、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きたしたときには、その感情は光となって、相手を照らし、人類を輝かすのです。

愛の心は、日常生活の中でどのように具体的に現わしていかばよいのでしょうか。

『愛・平和・祈り』によると、それは思いやりという心と、また寛容・赦しという心で現わしていけばよいといわれています。

思いやりの心は、愛の心が細かい心遣いになって、相手の想いの波に同調しながら光を入れてゆく、ということ、こちらから相手の心の中に入ってゆく。寛容の方は、相手の心の波、想いの波を、こちら側に受け入れて、自己の心の中で昇華させ

てしまうことです。

この二つの心があれば、たいがいの人は、その人に好意を持ち、その人の愛の心を受け入れるのです。

しかしこの真理を識っても神の愛を容易く現わすことができないのは、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働かだすことがなかなか難しいからと言えます。

この課題を解決するには、感情の波を超えて、その感情を純化していくほどの、強力な生命の根源の光をこの肉体に降ろすことがなによりも必要なのであります。

これを実現するために、宇宙天使から宇宙子科学を授かり、そして宇宙神から直接光をいただくことになったのです。

2003年に始まった究極の光の一筋を降ろす行事がそれであり、これを通し、2009年に富士聖地に四次元の大光明の共磁場を形成し、2010年に私たちの叡智のチャクラを開くことができ、そして2014年宇宙神と私たちの魂が直結することにより、宇宙神から直接光を頂く道が大きく開かれたのです。また2016年に大光明の共磁場を五次元に上昇することに成功し、神聖復活の印が降ろされ、神我一体、そして人類救済の道がさらに飛躍的に拡大しました。

これらの体験の事実は、強力な生命の根源の光を自分のものにできる基盤になったのです。

自分自身が変ればすべてが変わる

自分を救うのは、自分自身であり、自分自身の習慣を新しい神聖の習慣に変えることであると五井先生は言われていることは、この資料の冒頭で言及しているところです。

新しい神聖の習慣とは、業想念の心の習慣から解脱し、人間即ち不幸、悲しみ、恐怖、恨み、妬み、憎悪、不平、不満等々の想いや行為を、人間の真（神）性から出るものではなく、この世の中を、神の子人間が歩みつづけてゆく時に削りとられてゆく、闇の面の消えてゆく姿である、と全否定して神の光の中、本心に融合させてゆく習慣です。

また、新しい習慣とは、人間の天命である、神我一体、自他一体化の心、愛を深めていくということでもあります。

自他一体化の心、愛を深めていくと、どのように私たちは変わっていくのでしょうか。

結論から言えば、意識波動として業想念と神（光）の区別がはっきり実感できるようになり、神（光）中心の生活を営むことでしょう。

人は、自分の目で現実を客観的に見ていると思っていますが、実は自分の意識を通して現実を見ていて、その意識によっては、現実が現実以下に見えている場合もある。しかし、神とつなが

るチャクラが開き、神（光）の意識波動（神のバイブレーション）があることが分かるようになる、即ちこれまで自分の意識波動が低くしていたため、業想念そのものが自分自身であると錯覚していたのが、光の意識波動に出会うことにより自分の意識の波動を高くすることが出来るようになる、光そのもの自分こそが真実であると実感できるようになり、意識波動として業想念と神（光）の区別がはっきり実感できるようになり、感覚が微妙になり、風景も輝いて美しく見えるようになり、また音も味も、妙なる美しいものが感じられるようになるのです。

さらに『宗教問答』問80悟ると全く感情がなくなり、木石のごとくになるのではないかという人がいますが、悟りと感情についてご説明下さい）をもとに別の視点から整理しますと次の通りになります。

自己中心の感情、即ち業想念感情はないが、他の人の感情は人一倍感じる得るがその感情に執着せず把われずに、常に愛の本質である光に変えてゆき得るようになる。言い換えれば、業想念の波の中に生活しながらも、その業想念に把われずその波の中に光明波動を、自然法爾に流し得る人、即ち、その人の一挙手一投足が、神の子の本質である、愛と真の人となるのです。

私たちは、現に、先に触れたように2010年に叡智のチャクラを開き、宇宙神から直接、神のバイブレーションを受け取

り、感じ始めたのです。

自分の周りに渦巻く不安恐怖を、本心の光に還元し、自他一体の心、愛を深めたとき、失っていた直観力を取り戻し、自己のあらゆる動きが、そのまま他の人のためにもなり、人類のために役立ち、感謝と喜びにあふれた我即神也の我になっている自分、「神の器」となった自分に気づき始めたのです。

そして神聖復活の印や、大生命の根源である宇宙子（光）を私たちのチャクラを通して降ろせる呼吸法によって、自分の肉体を通して宇宙究極のエネルギーをこの肉体界に降ろしている実感を得て来ています。

即ち宇宙究極のエネルギーは、人間を通過せず、今生に現われることは絶対にありえない。人間の肉体は、神に似せられてつくられし極めて高度なる組織体であるため、宇宙神そのもの至高のエネルギーを媒体におさめ、知覚し、肉体のヴァイブレーションと合体し、変形させ、それによって、全人類に対して神の無限なるすべてを表現し示してゆく存在であるという自覚を、私たちは得てきています。

私たちは、新しい神聖復活の習慣を身につけることにより、業想念の波の中に生活しながらも、同時に神界にも存在できるようになる、否、できるようになったのであります。